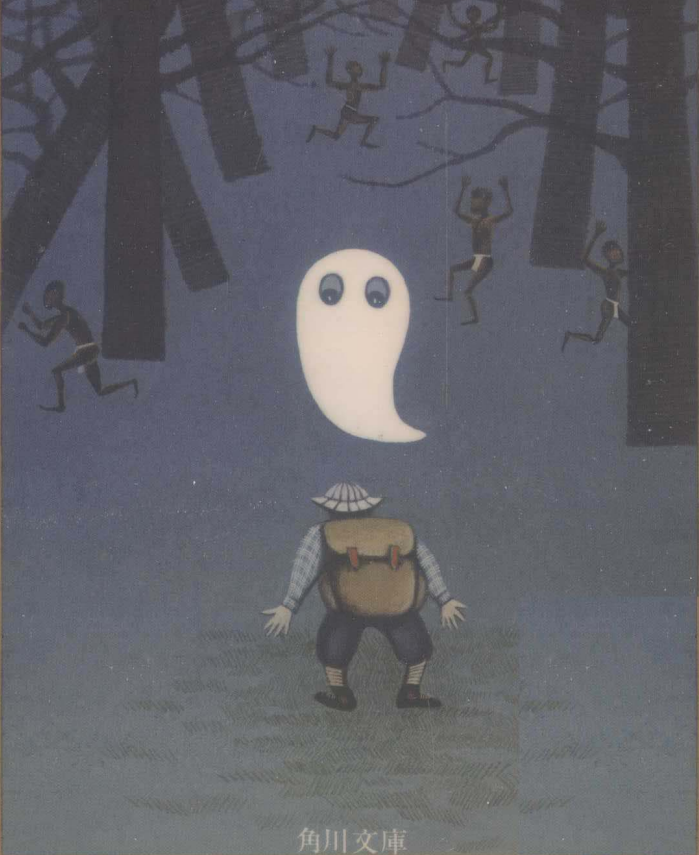


山だ原始人だ幽霊だ

西丸震哉



角川文庫

やま げん し じん ゆうれい
山だ原始人だ幽霊だ

にしまるしん や
西丸震哉



角川文庫 4895

昭和五十六年五月三十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話東京二六五—七—一一（大代表）

〒一〇二 振替東京①一九五二〇八

印刷所——厚徳社 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0139-326303-06(940)

7380-

山だ原始人だ幽霊だ

西丸震哉



角川文庫 4895

目次

山

山男のスキー術

ハケ岳の南麓にて

冬の甲斐駒ヶ岳

カップ山

一迫川

六月の山旅

お正月と山

赤道下の氷河湖

インドの森の中にて

原始人

原始人への仲間入り

三 二 四 七 五 四 九 三 三 六 八 七

山男蕃社に行く

七八

人食い人種を食う話

八九

原始社会の食生活

一七六

幽 霊

二四三

幽霊の仮説

二四四

怪談

二四六

テレパシー

二九〇

手相

二九六

中気をなおす

二九八

呪い殺しの実験

三〇一

雨やみの術

三〇九

六〇〇キロひとまたぎ

三二四

あとがき

三二九

解説

三三三

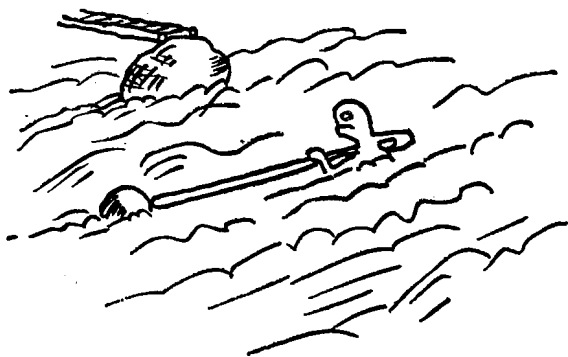
本文イラスト

星 新一
西 丸 震 哉

山だ原始人だ幽霊だ



山



山男のスキー術

山男という種族は元来スキーが下手なものだ。昔から山男はスキーが下手なことを自慢にさえしてきたくらいだが、これは決して良いことではない。むしろこれはスキー場でチャラチャラ滑って喜んでいるだけの文明人種に対する、原始人のヒガミであったのだろう。

私のスキー歴も山男のスキーの、ある一つの典型であった。

私が山歩きをはじめてから十五年の間、つまり終戦までは、スキーというものを足につけたこともなく、人がスキーをやっているのを映画以外では見たこともなかった。

おそらくチャンスがなかったからだろうと思っている。

雪の山はアイゼンと輪轡わかん（かんじき）を愛用していたのだが、二十代も終わりに近づくころになって、ラッセルの苦痛がだんだん耐えられなくなってきたようだった。そしてそのころでも売り物のなかったショートスキーを友人から買った。

なぜちゃんとしたスキーにしなかったかといえ、私のやりたいことはスキー滑降ではなくて、いかにして重い荷物にならずに、雪にもぐらないようにするかという点だけであったから。

そのころ、私のたいがい山歩きは単独行であったし、今さらスキーができませんとは言いた

くなかったので、最初のスキー登山も、もちろん単独行であった。しかもスキーに向いた山である必要はまったくなかったから、行った山は八ヶ岳やがたけだった。

稲子湯いなこをベースにして、ミドリ池めがけて雪の急な森林帯を進んだ。スキーは五尺の長さだが、新雪の中を一尺くらいのラッセルでご機嫌でエッサエッサと上る。本能的に私のスキーでの上りは第一歩から、まるで十年もはきなれているみたいに上手じょうずであったと記憶している。

中山峠直下なかやまとで、ひどい風雪となり、スキーで穴を掘ってもぐり込んだ。一晩明かすつもりだったのが、この穴の中に三晩すごすことになった。

下りはまっすぐ滑るだけで、直滑降、または斜滑降であり、止まり方、曲がり方はまったく知らないから、森林内での滑降は邪魔物が多くて参った。このときの下りで、あらゆるストック制動を考案しマスターした。ちよつとした方向変換は「ふみかえ」を本能的に行なった。この方法は自然なやり方で、行きたい方向へ曲がるのには、そちら側の足を外へ向けるのがてつとり早いからだ。ふつうの回転方法は反対側の足を先に曲げるといふ点で、まわりくどく不自然だから、私に思いつくはずもなかった。

中山峠からはじめてのスキー滑降は、ほとんど一日を要したが、その間意志に反して雪にまみれたのは二回であった。なぜならば、目の先の数十メートルを下るのに、どの方向へ行くべきかをジツクリと考えてから進むので時間はいくらでもかかる。しかし失敗はしない。見える範囲内だけしか考えられないのだから、下る距離もそれ以上ではなく、滑りながら考えるなんてすば

しこいことは、とても無理であった。

二回の失敗とは次のような事態であって、当時の私の知識としては意表外のことであつたわけだ。

前にもいったように人がスキーをしているのを見たのは、スキー映画の中でだけであつて、たしかドイツの「青春乱舞」だったと思う。

スイスイと滑って行き、向かい山の斜面を勢いつけて上って行く場面があつた。

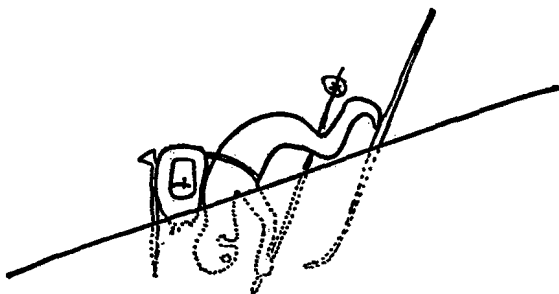
私の眼下に雪沢が一本あり、その向こうの斜面には木がなかった。私は「青春乱舞」の一場面をここで実行することとし、向こう側に乗り上げて、どこかで失速して止まることを想定して進んだ。

私は上りになる瞬間、おそらくエレベーターで味わう、背がちぢまるようなショックを感じず、だろうと期待して、まっすぐにおそれもなく滑った。

だが私は、向こう側の深い雪の斜面にスポツとはめ込まれた。足に長いものをつけられて、自由な動作でもがきながら、再び雪上に出てくるのに二十分くらいを費やしたろう。その間、あの映画はインチキだと心で叫び続けた。

あとで思えば、上りの斜面の角度が少しきつすぎただけのことだったが、スキーに対する不信感が、ここではじめて頭をもたげた。

二度目の失敗は突然やってきた。表面だけがうすく固化した雪面というのが見分けられなかつ



たからで、スキーの先端がささり、私の身体は前方に飛ばされて、首と両手が雪にささり、おまけに背中の中のザックが頭の上にかぶさって、それについているピッケルが雪にしっかりと突っ込んだ。

そのころの締具はかかどが自由なので、アキレス腱^{けん}が張られることもなく、どこにも異常は起こさなかったが、このかっこうではまったく動くことができなかった。虫ピンでとめられたような状態はどうにもならず、足はスキーというとてもないもののためにこれはだめ。動くのは肩からひじまでの間がほんの少しずらせられるだけだった。結局この可動の範囲を少しづつ広げることによってまた雪の上に立ったのだが、二十分はかかったように思う。連れでもいたらどうということもなかったのだが、一人では大変な事態が、こうちよくちよくあったのでは、安全な山行なんかできない。スキーというラッセル用具の具合わるさをいやというほど体験して、私のスキー不信はますます増大した。

稲子湯を去る朝、こんなところへスキーを持って来た、積雪シーズン中たった一人の客を、主人から女中さんまでが玄関前でズラリとそろって見送ってくれた。私は足にスキーをつけ、どうかもういいからはいってくれと頼んだのだが、決して聞き入れてはくれなかった。

スキーという道具、スキーでの滑降に興味を持っていたからにちがいないが、私は宿が見えなくなるまでのあいだ、少しもあわてないようすを見せる、いや堂々と滑って行く姿を見せる、つらい演出をしなければならないのに、大変な気苦労をした。

尾根をまいて、宿から見られなくなったところで、私は精神的な疲れで大休止をした。

この山行からあと、三年の間、私はスキーというものを一度も足につける気を起こさなかった。二度目は富士の七合目でスキーをしたことになるが、終戦直後、岩手県にいるとき、つまり八ヶ岳スキー行の前に一度、三十分ばかり足にスキーをつけたことがあることを思い出した。

県庁に用があつて出向いたとき、水産課長の家へ招待されて、しこたま飲んだ。私は知らなかったのだが、その課長には娘ばかり三人いて、上から順にかたをつけようとしていて、私が招かれたのは見合いをさせられたということになる。

娘が接待に出てきたようだったのは覚えているが、顔がどんなだったかも見ずに終わって、あとで課長の友人である試験場長にどうだと聞かれたとき、ハテ、そんな娘がいたかなあ、と本気で困惑したら、あきれた飲んべえだと思ったのだろう、もう二度と娘のことをいわなくなった。

その課長のうちに古いスキーが一台、立てかけてあったのを見つけて、翌日一日だけ借用し、

すぐ裏が山だったので、四〇センチばかりの新雪をスキーでエッサエッサと頂上まで上り、手ごろな斜面でヤツとばかり押し出した。一〇メートルばかりギシギシと動いたら斜面の途中で止まってしまったから、傾斜がゆるいのだと思い、四〇度もある急斜面でエイツとやったら、またまた一〇メートルくらいで止まってしまふ。これじゃ絶壁でも滑らなきゃだめだ。スキーなんて何が快適なものか、裏にワックスだ、パラフィンだとぬり立てることも知らず、ドカ雪の中でも滑れるものだと思っていたのがこんなことになった。

さて、ショートスキーを持っていた私は、三月末の富士山へこれを担ぎ上げた。当時は富士吉田駅から、まる一日かけて五合五勺の小屋までで一日行程だった。翌日は氷化した雪の上に三〇センチも雪が積もったので、頂上へ行くのは雪崩なだれがこわいということで、せっかくの快晴を停滞日にしてスキーをやることにした。

七合目までスキーを担ぎ上げて、大沢の大滑降に移った。今回は古本屋で買った山野さんやスキー術教本というのを徹底的に読破して出てきたので、自信がいっぱいだった。

例によって大沢の大斜面の斜滑降はスイスイで、これは本能的にうまくやれる。さて内足スキーを先広がりに出して、これに全体重を移し、外足で制動する段になると、スポンと前へほうり出される。こんなはずはないと何回やっても同じことで、教科書がだましやがったなとむくれた。それで仕方なくキックターンと斜滑降で小屋にもどってきた。

ずっとあとになって、このスキー術はシェーレンボーゲンという体系的にはまったく別個のも

のであって、滑りたての人のできるワザではないことを知ったが、右へ曲がるときに右足から曲がるのは当り前、わざわざ外足に乗りかえてからグルリと回るなんて、不自然きわまる話じやないか。私は理屈で割り切れるやり方をしたのに、どうして吹っ飛んでしまうんだ。もうこんなわけのわからないスキーなんか、やってやるもんかという気になった。

ご苦労さまにも、たいして使いもしなかったスキー道具を、また担いで帰る富士の山腹は長かった。もうこれで私はスキーというものにすっかり愛想をつかしてしまい、その後数年間、ふたび輪轡^{わかん}とアイゼンの世界へもどっていった。

U倶楽部^{クラブ}という山岳団体の役員をやっていた友人が、苗場山^{なえぼやま}の西北尾根をやらないかというので、OKしたところが、私がスキーを使わないと聞いたたら、とたんにそれじゃテンポが合わなくてまだるっこいからといって、逃げてしまったのが頭へきたこと、そしてその翌年の一月に那須^{なす}へ行ったのがスキーを本格的にやるようになったきっかけとなった。

那須の朝日岳^{あさひだけ}東尾根は、単独行をやめた私が無二の山友達としていたパートナーと二人連れだった。彼は山スキーを学生時代からやっていたので、達人の域であったから、またスキーを使わされた。このときは急場だったので現地の知人からの借物であった。私の制動技術はストックを駆使することだけであつたから、氷の急斜面でストックを二本まとめて折ってしまった。

彼はいくらなんでもそれで山を滑るのは強引すぎるから、回転方法を習ってみろという。じゃあ真似^{まね}するから手本を示してくれ、というわけで、まず全制動滑降と回転、私はその後について

同じことをして、なんだわけないじゃないか、おや覚えが早いな、じゃあ今度は斜滑降からシュテムボーゲン、こうやってこうやるのがコツだ、ああそうか、こんな具合か、あれ、できた。なんのことはない、先生がちゃんとついて一通りやってくれば、すぐにその域にまで追いついてしまふのは、当時はわけのないことだった。

だから私にとって、スキーというものはうまく滑るものだと認識するまでには時間がかかったが、あとは回転でも藪くぐりでも少しも苦勞して覚えたといいことがない。

その代わり、それからしばらくの間に身につけた技術からさきは、ちっとも進歩がない。新雪の中で荷物を一通り背負ってやれる技術と、スキー場でチャラチャラやる技術とがまったく同じだから、近ごろは人なかでは見られないことおびたらしい。だが山へはいって、グレンデで一級でございというのがモタモタしていようものなら、徹底的にしごいて、オールウェザースキーヤーに仕立ててやることにしている。

ほとんど無抵抗の雪面であるスキー場でしか滑れない人間は、開拓精神のない、向上することのない人達だ。どんな山へでもゴソゴソとスキーではいつて行くことが、どんなに楽しいものか、知ろうとしない人にはこの喜びはわかるまい。

女の子の前でカッコいいところを見せることで満足していられる人には、スキー場というダンスホールが存在するだけで山は目の中にはいつてこない。

幸いなことに、私について山へ来てくれる人は、みんなスキー場から逃げ出して、自由の天地